

鞍くら

馬ま

寺でら



父頼信よりのぶと田所たどころの伊佐いさは、郎党らうたうを連れて国許くにもとへと帰り、景弘かげひろは祇園社ぎげんの宿坊しゆくぼうから清盛きよむねの侍屋敷しやくやしきへと移り住んでいた。

清盛きよむねが、若い景弘かげひろに目を留めたのは「八幡神社やわたの神官かみであられる田所たどころの伊佐いさどのより騎馬弓矢きまゆやと刀術たうじゆつの教えを受け、武道ぶだうに励みおります」という頼信よりのぶの言葉に、心を動かされたからであつた。

清盛きよむねは、父忠盛ちかむねから伊佐いさの勇名ゆうなを聞いていた。

頼信よりのぶを扶たすけて、二度にわたる海賊掃討かいぞくそうたうの折まげにみせた警固衆けいこしゆうを率らいての鮮やかな統率とうそつぶりと、勇猛果敢ゆうまうくわんな戦いくさいぶりは、清盛きよむねの脳裡のうりにも絵巻物えまきもののような姿すがたが刻印けいおんされていた。

伊佐いさは、強弓ちやうきゆうを引いた。

阿賀あがの漕ぎ手こぎて二十挺櫓ちようろうの高速船こうそくせんから、矢継ぎ早やつぎはやに射やかける矢やは、潮うしほのながれを熟知しゆくちゆして動き回まわる海賊かいぞくたちにも的確とてつに届いたき、射竦いすくめられた賊ぞくは海中かいちゆうへ落ちるものや懼おそれて逃にげようとするものが続出つづしゆつした。

「佐伯景弘さへきかげひろと申したか…」

問といかけた清盛きよむねは気軽きけいに階かゝを下りてきた。

「安芸国あきは、どのようなところじゃ」

「日の明あるいところでござります。日の明あるい海うみに島しまが点在てんざいし、箱庭はこにわのような美うつくしきでござります」
景弘かげひろは臆おそせず、嚴島神社えんじまについて話わした。

「安芸国あきの嚴島えんじまの社やしろ…。そこに空海上人くわうかいが行いかれていたか…」

清盛きよむねは、新たに自分の所領しよりやうになつた遥はるか西国さいこくの内海うちうみに浮かぶ「神の島かみ」をしきりに心に描えいているふう

だった。

「田所の伊佐と申すもの。弓矢と騎馬の達者ぶりは父より聞かされておるが、そなたが師より学びし刀術は、如何なものなのか、知りたいものじゃ」

武術好きな清盛は、中でも刀術に強い興味を持っていた。

父忠盛が備前守であった頃、刀工の里である備前長船より優れた刀剣を献上されていた。忠盛は、早くからこの刀剣の聖地に目をつけていた。

優れた刀剣は神社に奉納されることが多く、神官は、その奉納刀の保管者であると同時に、刀術の研鑽に励み、独自の技も身につけていた。

「景弘。その刀術：ここで披露せよ」

清盛は、そう命じた。

命じられた景弘は、自分の腰に佩いた刀でなく、郎党に願ひ出て、木太刀を用意してもらうと、それを肩に担いだ格好で庭先に進み出た。清盛の目には、景弘の動作は少しも力が入っていないように見えた。

景弘は肩の刀を無造作に左右交互に振り下ろし、軽やかに爪先立って動いた。

「…神楽の舞のようじゃな」

清盛は、そう洩らした。

景弘は脇に下ろした刀を後ろに引き、左手を刀の峰に添え、ぐいと突き出し、再び引くという所作を繰り返した。

清盛の目に真剣な色が浮かんできたのは、刀を肩に担いだ景弘が、背を丸めるように前かがみになった時だった。

肩に担いだ刀は、自らの背に斜めに被さり、打ち掛かる敵の得物を防いでいた。そして、その直後、屈んだ体をヒラリと跳躍させると、恐ろしい速さで景弘の木太刀は突き出された。

「安芸の海賊の刀術でござりまする」

「恐ろしき刀術よな」

清盛は、そう一言評した。

「これより後は、刀術の修練に励み、それをもって清盛さまにお仕え申しあげたく。兵士の端にお加えくだされ」

と、景弘も直に願っていた。

「北院の警護に罷りいでし頃、院の衛士一の手練者がおった……」

その者と見知りおけば、話も弾もうが……と清盛はいい、苦笑する顔になって

「しかし、そ奴は、警護侍をやめ、今は出家しおった……」

「衛士一の手だれ……そのお方は、何と申すお方であられましようか」

景弘は、面に血の気を上らせて訊ねた。

「今は、鞍馬の山に隠遁しておるが、……佐藤義清と申す」

紀伊の名門貴族の出であった佐藤義清は、上皇の警護役であった北面の武士として仕えた。文武両道に優れ、弓矢の技だけでなく、崇徳天皇の和歌の相手に召し出されることが多く、若い頃から裡に秘めた情

熱の血を滾らせた若き武士であつた。そして妻子さえ棄てて都を後にしたのは、まだ二十三才の若さであつた。

義清は、清盛にとつて、衛士仲間にあつて、数少ない気の許せる朋輩の一人であつた。

「鞍馬の山……」

景弘は、都の北方に広がる山塊に思いを馳せた。

「鞍馬の山中で、出家修行中であるが、この根っからの武人は、今も刀術の修行を積んでおる」
清盛は、景弘にそう語り

「義清にとつて、刀術は、俗世との縁を断ち切るものにて……」
と、言い添えた。

「義清が、自ら悟つた刀法は、北辰の刀法と申す」

「北辰……」

景弘は、清盛が口にしたその一言に、激しく動揺していた。

景弘は、今は西行と名を変えた佐藤義清を訪ねて、鞍馬の山に向かつていた。

春は一気に花が咲き、野山の緑は日を追つてその葉色を濃くしていた。

下賀茂神社の糺の森を過ぎると、昼なお暗い山道は漆黒の朝闇に包まれ、景弘は厳島の山中とは違つた瘴気に怯えながら、森の奥へと足を踏み入れていった。

景弘は、清盛が口にした義清の刀術だという「北辰」のことを考え続けていた。

「ここ鞍馬も、都の北方……」

この山に群れ集う名も知れぬ修行僧や山伏たちのことを、景弘は想像していた。
「みな、北辰に思いを抱く者たち……」

まだ、十七才になったばかりの景弘にとって、途方もなく巨大な未知の森が、鞍馬の山として立ちはだかつている錯覚があった。

都の空にも、子の星が白く輝いていた。

清盛の添え状を懐に、景弘は、まだ暁闇の中、鞍馬の山を登った。

「弥山頂上とは、嚴島神社、外宮の地御前神社、そして極楽寺の三つが、真北に向かう一線上に並ぶ……」
と、景弘は父から訓えられていた。

「その先に、北斗の星が……」

それは、紛れもなく、海人族の海神信仰に違いはなかった。

子の星と呼ぶ北極星を巡る七つの星、北斗七星が「北辰」とよばれる。

この北辰は、上古の昔から方角が命である「海人」たちの守り神として崇められた。

「嚴島弥山頂上の真北にある意味は……」

そのことに、景弘は尽きぬ興味があった。

景弘が佐藤義清という元北面の侍に強く惹かれたのは、清盛のいう「北辰」という言葉ゆえだった。

「北辰」を名乗る刀術とは、どんなものなのか。

景弘が師と仰ぐ田所の伊佐も、八幡神社の神主として、奉納刀の保管だけでなく、刀術の求道者として日頃から研鑽を重ね、佐伯家の郎党や土地の壮丁に武術や相撲を訓え、舎人たちに学問を説いたりしていた。

「伊佐の流鏑馬は、都にも聞こえておる」と、頼信は酒に酔うと嘯いた。

父頼信の柔和な顔と対照的に、殆ど同年配である伊佐の彫りの深い顔は意志の強さがあらわれ、白哲長身瘦躯のこの伯父に、幼い頃から景弘は剣の修行を師事してきた。

剣の師である伊佐は、八幡神社の神官としての勤めの中にあつて、北辰への祈りを日々欠かさず、これは景弘にとつても身についた慣習であつた。

鞍馬の山の深い森の中に隠れるように鞍馬寺はあつた。金堂の中央には本尊の毘沙門天、左に護法魔王尊、右に千手観音。大治元年（一一二六年）の大火で堂宇は焼失したが、秘仏は残っていた。

参道の急峻な石段を景弘が上り始めた頃、漸くあたりに薄明るい朝の光が射し始めていた。

景弘が麓の山道にかかる頃から、自分の背後に迫る何かの気配を感じていた。

「鞍馬の山には、天狗が棲む……」という。

ふいに羽音を立てて飛び去った大型の鳥に景弘は心を竦ませたりした。

「極楽寺の森にも天狗は棲む」という。

通いなれた厳島の自然林の中で日々修行を積んでいた景弘は、これまで大きな鳥に怯えることはなかつ

た。

「敵島の若とのさま…」

思いがけなく、そう声が出したのは、石段の脇の木立の中からであった。
若い女の声であった。

「誰じゃ」

景弘は、緊張して油断無く身構えていた。

「このような早朝に、鞍馬へお参りでござりましょうや」

声の主は姿を隠したまま、そう問いかけた。

天に届くかと思える大杉の太い幹の陰から姿を現したのは、小袖に獵師のような毛皮を纏い、山袴を穿いた若い娘だった。

「そなたは、…芙蓉どの」

景弘は、表に血の色を上らせて、目を瞠った。

景弘は、芙蓉の頼みを清盛に願い出るまでもなく、境内に露店を出すものや物売りなどを差配する役僧の一人に直接申し入れていた。

それは、仁和寺の草庵に住むという芙蓉の師とは、かつて鳥羽天皇の中宮である待賢門院璋子に仕えて堀河局と呼ばれ、歌人として西行とも親交のある御方ではないかと、父頼信から聞かされていたことを思い出したからでもあった。

叡山の僧の中には、六波羅を畏れぬ荒法師もいると聞くが、景弘は芙蓉一人を守ることができぬのであ

れば、清盛さまの警護侍としての務めは勤まらぬと、思った。

「芙蓉は、堀河の尼さまの庇護を受けている身。六波羅とも縁のある…は、偽りにはならぬ」
景弘は、そう思った。

「北野の前と申す娘は六波羅さまとも縁あるお人。役目にことよせ娘に不埒な真似に及ぶでないぞ。そのこときつと申し付ける」

景弘は、思い切つて高飛車な言い方で、そう迫った。役僧は景弘の氣迫に圧されたかのように頷き、六尺豊かな偉丈夫の若者に奇異な目を注いだ。

「お主のいうとおりに致そう」

僧は、景弘が清盛の警護侍の一人と知つてその申し入れを聞き届け、芙蓉は祇園社の境内で願いどおり易札を売り始めた。

ここでは、「北野の前」と名乗っていた。

八卦や易を生業なりわいにしている芙蓉は、祇園社の境内に質素な板囲いの小さな庵いおりを拵え、参詣客に声をかけた。

「卦けを見て進ぜましょう」

その金鈴を振るような声に、客は群がっていた。

「佐伯景弘さま」

大杉の陰から姿を現した山袴やまばかまの芙蓉は、そう景弘に声をかけた。

思いがけない芙蓉との再会であった。

前に行く景弘に、芙蓉は麓から気づいていたという。

「どうして、芙蓉どのが、ここに……」

朝闇は薄れ、森の木の合間から微光が洩れ、青い霧が流れていた。

その霧の流れの中に、夢のように芙蓉は佇んでいた。

「仁和寺の草庵での巫女修行の傍ら、山修行のために鞍馬の山へ通うております」

芙蓉は、そう語った。

「山修行……」

鞍馬寺は、宝亀元年（七七〇年）奈良唐招提寺で知られる鑑真の弟子鑑禎が天台宗の寺として創建。都の北方の鎮護の寺として多くの信仰を集めた。

鞍馬の山に天狗がおる……という噂は、鞍馬の山深く走駆していた修験者や山伏の姿を目にした者の謂いであつた。

「芙蓉も、この天狗の仲間……」

景弘は、ふとそんな思いが過ぎつた。

「芙蓉どのは、西行さまという修行僧をご存知あるまいか」

「西行さまなら、よく存じております」

今は、鞍馬寺の山房にお籠りの修行僧で、元の名を佐藤義清さま……。景弘が口にした名を、芙蓉も同じように復唱していた。

「その北面の武士であられた佐藤義清さまに、ご用あつてのござりましようや」

景弘は、清盛からの添え状を持っていた。

「あれにおわしますのが、西行さま……」

芙蓉は、そう景弘に伝えた。

鞍馬寺の奥の院にある魔王殿に西行は籠こもっていた。護法魔王尊は背中に羽が生え、鋭い目に鼻高の恐ろしい形相をしていたため、鞍馬天狗てんぐの名称で呼ばれた。

勤行を終えた西行が、魔王殿から姿を見せたのは、深い谷に漸ようやく朝日が届きはじめてからであつた。

「あのお方が、西行法師さま」

芙蓉の取次ぎで、景弘が待つていた山道の一角にやってきた西行は、静かに微笑ほほえみを浮かべており、景弘は何かひどく軽やかな印象を受けた。

西行も、この日初めて会った景弘の、人を逸そらさぬ無垢むくな純朴さを感じとり、たちまち心を開いた。

清盛からの添え状に目を通した西行は、

「巖島とは、どんなところじゃ」

と尋ねた。

清盛と同じことを尋ねる西行に、景弘は可笑おかしみを覚えた。

景弘は、祖佐伯鞍職くろもとが創建した巖島神社について語り、島の中央に聳そびえる弥山の頂と巖島神社と外宮の地御前神社だけでなく、極楽寺までも南北を貫く直線上にあり、その北方の空に北辰ほくしんを戴いたくと説いた。

この北辰ほくしんへ向かう線上に、父頼信が海面に浮かぶ神殿を建てる夢を持っており、景弘自身も夢が叶かなうべ

く北辰ほくしんの星に祈いのっていることを打ち明けた。

この二人のやりとりを、芙蓉は興味深く聴きいていた。

「鞍馬の山にも北辰ほくしんを信仰やまがしする山伏やまがしや修行僧さんろうが参籠さんろうしており、日夜勤行の合間に、杖術じょうじゆつや刀法の稽古きこを積たんでおる……」

と、西行は景弘に語った。

この日、景弘は、鞍馬の山中で修行しゆぎやうしている「北辰ほくしんの信仰者しんぎやうたち」の存在しゆんざいを訓おしえられていた。

「天の星、そして万物はみな動くが、北辰ほくしん一点のみは動かうかず……」

そのゆるぎなき不動ふどう……それが、わが北辰ほくしんの刀法の極意ごくいじゃ……と、西行は告げた。